

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520317

研究課題名 (和文) 台湾原住民諸語の普遍性と多様性に関する類型論的研究

研究課題名 (英文) Typological studies on universals and variations of Formosan languages

研究代表者

片桐 真澄 (KATAGIRI MASUMI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：80294388

研究成果の概要 (和文)：

本研究において、台湾のオーストロネシア系原住民族によって話される諸言語の形態・統語上の多様性について、類型論的観点から実証的研究を行った。その結果、特に、そのヴォイス体系や能格性に関しては多様性が見られ、「フィリピン・タイプ」と呼ばれる豊富なヴォイス体系を持ち強い能格性を呈する言語から、一見限定的なヴォイス体系で対格的な様相を呈する言語まで多様性が見られた。この多様性を統一的に捉えるべく、台湾原住民諸語の他、フィリピン諸語やインドネシア諸語などの関連諸語との比較対照を行い、その結果これらの諸言語がヴォイスの縮小という観点から統一的に捉えられることを見た。

研究成果の概要 (英文)：

In this typological studies of Formosan languages, spoken by aboriginal peoples of Taiwan which belong to Austronesian family, I conducted research on the morphosyntactic variations of these languages, as well as those in related languages such as Philippine languages and Indonesian languages. In particular, I focused my studies on their voice systems and ergativity, and observed that there was an apparent contrast between languages with a rich voice system called "Philippine-type" and strong ergative tendency and those with limited voice and accusative characteristics. In spite of the apparent contrast, however, I showed that it is possible to give a unified account of the variations in terms of voice attrition.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：言語類型論

科研費の分科・細目：言語学・外国語

キーワード：台湾原住民諸語、ヴォイス、能格性、フィリピン・タイプ

1. 研究開始当初の背景

近年の言語の類型論的な研究における重要な課題のひとつとして、「フィリピン・タイプ」と呼ばれる豊富なヴォイス（あるいはフォーカス）体系の解明がある。この体系はフィリピン諸語に特徴的に見られるものであるが、この本質および能格性との関係については未だ研究者の間でコンセンサスが得られていない。この原因のひとつとして、対象とする言語により、ヴォイス交替の程度や能格性には差異があることが考えられる。これまでフィリピン諸語を研究する中で、フィリピン諸語に見られるヴォイスや能格性に関する多様性は他の関連諸語にもあることが予測され、またそれらの言語との比較・対照により、フィリピン・タイプのヴォイス体系の本質や能格性との関係を明らかにすることにつながると考えた。特に、フィリピンと地理的にも言語的にも近い台湾原住民諸語は、よりオーストロネシア祖語に近い形を保持していると言われ、これらの諸言語の多様性を研究することにより、フィリピン・タイプのヴォイスの本質やその変異のあり方、能格性との関係などの解明に大きく寄与するものと考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、台湾原住民諸語の形態・統語・談話構造に関する実証的な研究を通して、その普遍性と多様性を明らかにすることにより、フィリピン・タイプのヴォイス体系の本質や能格性との関わりなど、今日の類型論的言語研究における中心的な問題を解明することを目的とする。台湾原住民諸語は、オーストロネシア祖語に近い文法体系を保持し、フィリピン・タイプと呼ばれる豊富なヴォイス交代と能格型に近い格体系を持つと言われているが、そのヴォイス体系や能格性に関しては諸語内でも重要な相違が見られ、各言語の詳細な調査と分析は、フィリピン・タイプ諸言語全体の類型化や、その普遍性と多様性に対する統一的な説明に大きな手がかりを与えると考えられる。また、台湾原住民諸語は、現在12言語あるとされているが、その多くが話者数百人から数万人の少数言語であり、その記録と保存にも努める。

3. 研究の方法

本研究においては、台湾原住民諸語やその関連諸語の多様性を見ることによって、その変異のあり方を捉える必要から、文献・記述資料の収集とともに現地調査による実証的な研究方法を主としてとる。こうして得られた資料を分析することにより問題点を抽出し、さらに現地調査を行う。また、関連諸語との比較・対照を行う関係から、フィリピン諸語やインドネシア諸語に関する資料収集

と調査も行う。その中でも、台湾原住民諸語と類似を示す言語をいくつか絞り、さらに調査を行う。具体的には、以下の通りである。

(1) 台湾原住民諸語に関する文献・記述資料の収集

まず、台湾原住民諸語の文献資料および記述資料を収集し、その概要を知る。台湾の政府機関である中央研究院で多くの記述資料および研究資料が入手可能である。

(2) 現地調査による口述資料収集

台湾原住民諸語のうち、ヴォイスや能格性に関して特異な位置を示すと思われるルカイ語を中心とする現地調査を行う。調査は、母語話者であるインフォーマントとの対面調査で行い、質問票によるものと自然発話によるものの両方の資料を収集し、デジタルカメラで記録と保存を行う。

(3) 台湾原住民諸語に関する言語資料の整理と分析

台湾原住民諸語の言語資料の文字化と記述を行い、形態や構文ごとに整理して分析を行う。また、デジタルカメラで記録した映像資料をコンピュータ、DVDレコーダーを用いて編集し、DVDに保存する。整理と分析により新たに出てくる問題点や資料上の空白を抽出し、再度現地調査により確認する。これを繰り返す。

(4) インドネシア諸語など他のフィリピン・タイプの諸言語に関する文献資料等の収集

初年度の調査と分析の結果、台湾原住民諸語の中でもヴォイス交替の範囲や能格性に関しては多様性が見られ、それがフィリピン・タイプの諸言語全体の多様性と平行的に見られることから、ルカイ語と類似した交替の範囲を示すバリ語などのインドネシア諸語について、文献資料などの資料の収集を行う。

(5) 得られた資料の整理および分析・考察

得られた各資料について、分析・考察を行う。特に、形態・統合資料を見る限りにおいては、ルカイ語の特異性に関して、従来他の台湾原住民諸語やフィリピン諸語と異なるタイプとして捉えられてきたヴォイス体系が、バリ語などに見られる縮小したフォーカス体系と類似していることから、オーストロネシア諸言語の中で統一的に捉えられることが可能であると考えられた。このことに関してさらに談話・テキスト資料により実証する必要がある。

4. 研究成果

本研究においては、台湾原住民諸語の文献・記述資料の整理を行うとともに、ルカイ

語を中心とする現地調査による資料収集を重点的に行い、台湾原住民諸語の形態・統語に関する分析・記述・考察を行った。そのうえで、台湾原住民諸語、および系統的・典型的関係の深いフィリピン諸語との比較・対照を通して、これらの言語のヴォイスと能格性に関する普遍性と相違性に関する統一的な説明を試みた。具体的な研究成果は以下のとおりである。

(1) 台湾原住民諸語の形態・統語に関する言語資料の収集と整理・分析および考察

収集した言語資料の整理と分析を行いながら、分析の結果新たに必要となった現地調査により収集した。これらの資料を整理し、台湾原住民諸語、特にルカイ語の形態・統語および談話についての記述を行った。

(2) 台湾原住民諸語の類型化とフィリピン型諸言語との比較・対照

資料の分析を通して、台湾原住民諸語および、系統的・典型的関連性の高いフィリピン型諸言語との比較・対照を通して、これらの諸言語におけるヴォイスや能格性に関する考察を行った。その結果、ルカイ語は他の台湾原住民諸語とは異なり、フィリピン型ヴォイス交替がなく、能動・受動の対格型ヴォイス体系に近い形であるということがわかった。一方、ルカイ語以外の台湾原住民諸語は、程度の違いはあるものの、フィリピン型ヴォイス体系を持ち、能格型に近い格体系を持つことがわかった。

(3) 台湾原住民諸語およびフィリピン型諸言語のヴォイスや能格性に関する統一的理論化の試み

(2)により、台湾原住民諸語内でヴォイスや能格性に変異があることがわかったが、このような変異を統一的に説明する理論化の試みを行った。他のフィリピン型諸言語においても、ヴォイス交替の程度や能格性には変異があり、特にインドネシア諸語のバリ語などもルカイ語に類似した限定的なヴォイス体系を持ち対格的な様相を呈することから、フィリピン型体系の縮小という観点からヴォイス体系や能格性に見られる関連諸言語の多様性を統一的に捉えられるという結論に至った。

(4) 得られた成果の位置づけと今後の展望
従来、フィリピン・タイプのヴォイスと能格性に関する議論が続けられてきたが、ヴォイスの縮小という観点により、いわゆるフィリピン・タイプの諸言語とその関連諸言語に見られる多様性を統一的に捉えられる可能性を示したことによって、言語の個別的研究から以後の研究のあり方に一定の問題を投げかけることが期待される。一方で、ヴォイスの縮小という概念は、通時的な裏づけや縮小

の動機に関する考察が必要となる。これらの点については、より多くの言語で実証する必要がある、今後の課題として残る。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

[学会発表] (計2件)

1. Katagiri, Masumi “Word order variation in Tgalog.” 11th International Conference on Austronesian Linguistics, June 22-25, 2009, Aussois, France.

2. Katagiri, Masumi Topicality of topic in Tagalog: Revisited from typological perspectives.” 10th International Conference on Austronesian Linguistics, January 19-22, 2006, Puerto Princessa, Philippines.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片桐 真澄 (KATAGIRI MASUMI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：80294388